

郷土博物館・文学館だより

早いもので、当館が今年の7月にリニューアルオープンをし、1年が過ぎました。そこで、この1年間で開催した3回の特別展について、ちょっと振り返ってみることにしましょう。

開館第1回目は、「ハチ公のみた渋谷」でした。この展示では、上野の国立科学博物館からハチ公のはく製を2ヶ月間お借りしましたが、このはく製がこのように長期に貸し出されたことは今までなかったようです。はく製をみた人たちからは、「ハチ公の顔立ちが意外にりりしい」など、たくさんの声が聞かれました。

第2回目は、今年の10月に國學院大學と共催で行った天神人形の展示でした。当館と区内の大学や文化施設とが連携する、博学連携の試みとして最初の事業でした。展示した天神人形は、明治神宮造営に関わった宮地直一博士が収集したコレクションで、現在は大学が所蔵して

います。今年も、10月には渋谷と関わりのある折口信夫博士の展示を共催で行う予定です。

第3回目は、先月閉会した「文芸評論家 奥野健男の仕事」展でした。奥野はその一生を恵比寿で過ごしたひとで、展示では彼の執筆活動や幅広い交友関係などを紹介しました。

当館では、これからも渋谷にちなんだ展示を企画していきます。ぜひ、ご来館ください。



平成18年度第1回特別展
「文芸評論家 奥野健男の仕事」展示風景

平成十七年度 渋谷区現代短歌 優秀作品発表

逸見久美選

渋谷区と、自認の我が迷うなり

駅周辺に緩なす大路

(渋谷区 毛部川幸子さん)

急患を運ぶらしへりが飛び立ちてゆく

天現寺広尾病院

(渋谷区 山内二三子さん)

ハチ公前私の姿を探す君

あと少しだけ見たいようかな

(世田谷区 水上唯子さん)

薔薇の咲く代々木公園に佇めば

練兵場たりし日を思い出す

(渋谷区 中野タツエさん)

道玄の坂の向こうに文化村

ロマン溢れし上弦の月

(文京区 三宅絢子さん)

玉川上水と三田用水

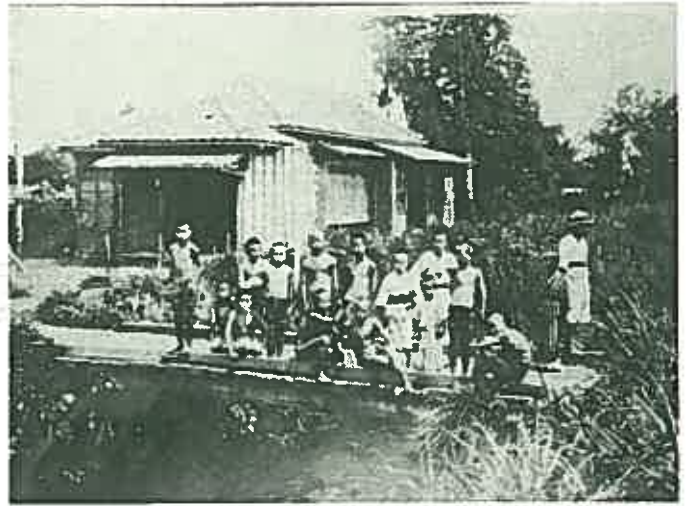
現在の笹塚駅付近を歩くと、都心ではめずらしい清らかな小川が流れているのが目に入ります。これが江戸時代初期に造られた玉川上水の跡です。

徳川家康が江戸に幕府を開き、江戸の町の人口が急激に増加するようになると、幕府は飲料水の確保という難題をかかえることになりました。その対策としてすでに神田上水が造られていましたが、それでも不足だったため、承応2年（1653）に多摩川の水を江戸に引き入れるための工事がはじまりました。そして翌年には羽村の取水口から内藤新宿まで約43kmの玉川上水が完成しました。上水の土木工事技術は高度なもので、渋谷区域の地形図を見ても、笹塚・西原付近の凹凸の激しい地形を見事にくぐりぬけて水が流れていることがわかります。

玉川上水が完成すると、上水の水はいくつかに分水されるようにもなりました。寛政3年（1791）に作られた『上水記』によれば、その当時、現在の渋谷区域内には5つの分水がありました。主に農業用水に使用されていたようですが、中には神田上水を補助するための分水、あるいは現在の代々木二丁目付近にあった大名屋敷（宇都宮藩戸田家下屋敷）の庭園へ流すための分水などもありました。

この区内の分水の中で最大の取水量をほこったのが、寛文4年（1664）に建設された三田用水です。三田用水は、笹塚で玉川上水の水をわけ、現在の渋谷区の西側、渋谷村と目黒村の境を通過して大崎・三田の方まで流れていました。

三田用水は飲料用水が主目的だったため、当



大正中期の玉川上水（現笹塚駅前付近）

初は三田上水とよばれていました。しかし、享保7年（1722）に玉川上水・神田上水を除く上水は廃止されます。これは室鳩巢（むろきゅうそう）という学者が、江戸に多かった火事の原因について、江戸市中に走る水道管によって大地の水気が吸い取られていると主張したからだといわれています。しかし、農業用水に困った上水流域の村々の願い出によって、翌々年に三田上水は用水として使用が認められるようになりました。

この用水の水は明治に入ると、恵比寿のビール工場（旧サッポロビール恵比寿工場）でも使用されるようになりました。そのため、工場がビール製造の水を完全に水道管の水に切り替える昭和49年（1974）まで、三田用水は水道として機能していました。現在では、用水の跡はほとんど残っていません。

なにかと水を多く使う季節ですが、蛇口のむこうに先人達の苦勞を思い起こしてみると、ちょっとばかり節水に役立つかもしれません。



山の手ッ子、渋谷ッ子の文芸評論家 奥野健男

文芸評論家 奥野健男（おくの たけお）は、大正 15 年（1926）に、豊多摩郡渋谷町鎗ヶ崎（現在の渋谷区恵比寿南）で誕生し、平成 9 年（1997）に没するまで、この地で過ごした文学者です。父奥野健一は、当時東京高等裁判所に勤務していましたが、後に最高裁判事となり松川事件、八海事件を、「疑わしきは罰せず」と審議したひとで、「人権擁護派」の判事でした。

奥野は東京府青山師範付属小学校（現在の学芸大学付属小学校）・旧制麻布中学校を経て、東京工業大学付属工業専門部に入学しました。その時の様子は、「一九四四年五月、全学生勤労働員の為、ひっそり静まりかえった葉桜の工大で、付属工業専門部第一回の入学式が行われ……」と、彼の著「戦争の孤児」（『科学の眼・文学の眼』より）に記されています。やがて戦後の文部省の方針により専門部の廃止が決り、昭和 23 年（1948）3 月第二回卒業とともに専門部はなくなります。奥野は「工大以外の母校のない卒業生」という経験を経て、東京工業大学化学科に進みました。入学後、同校文芸部に参加し、雑誌『大岡山文学』88号（昭和 27 年 6 月）に原稿用紙 210 枚の「太宰治論」を発表し、4 年後には、第一評論集『太宰治論』（昭和 31 年 2 月 近代生活社）によって注目を浴びました。この『太宰治論』は現在でも、太宰治論を学ぶ折には必須の書となっている作品です。同時に同時代の作家論も多く執筆し、「作家論作家」と自評する作品も残しています。

奥野は、東工大卒業後は高分子化学の技術開

発を進める東芝マツダ研究所に勤め、昭和 34 年（当時 33 歳）には、「大河内技術賞」を「銅被服積層板の製造方法」で受賞しました。この頃の奥野は科学技術者・新進評論家として活躍するばかりでなく、「劇団 青年座」にも参加し、演劇・音楽分野でも批評を執筆するなど、一日に三つの仕事をこなしていました。それが約 10 年間ほど続き、睡眠時間は平均して 3 時間半であったと回想しています。時には『現代評論』『現代批評』の編集・発行人となり、同人の合評会場として、自宅に 20 人ぐらい集まる時もあったようです。また恵比寿駅近くの行きつけの店「さいき」も会場に使われていたそうです。

奥野の行った仕事には、吉本隆明、北杜夫、島尾敏雄、三島由紀夫ら同世代の作家を見出すとともに、丁寧に読み解く時評にも定評があり、「泉鏡花賞」の選考や新聞時評の執筆も手がけました。文学を基盤に他の分野も取り組んだ作品『文学における原風景』『“間”の構造』では、日本建築学会百周年記念文化賞を受賞するなど高い評価を得ています。



自宅で『太宰治論』を執筆していた頃の奥野健男

収蔵資料紹介

ちゃぶだい
「卓袱台」



今回ご紹介する資料は、原宿に住んでいた海軍士官が使用したものです。この資料は、卓袱台が全国的に普及する前の明治頃に作られた、大変貴重なものです。

卓袱台とは、座敷用の低いテーブルで、四、五人が座れるくらいのおおきさの円形または方形の板の下に、四本の脚がつけられたものです。脚の多くは、折りたたみができ、簡単に収納できます。この利点を生かし、狭い日本の住宅では、居間の使い方として、食事の際には卓袱台を置いて食堂とし、夜はそれをかたつけて布団を敷き寝室とする家が多かったようです。そのため大変重宝されました。しかしその卓袱台の登場は意外に新しいのです。日本には食卓を大勢で取り囲んで食事する風習がありませんでした。それは身分制度のためで、江戸時代は人間関係はすべて上下

の関係であり、家族でも決して平等ではなく、個々に異なった膳を使いました。

では、いつ卓袱台は生まれ、そう呼ばれたのでしょうか。これについては、はっきりわかっていません。「ちゃぶ」は、中国語の「卓袱」の発音から来ているといわれますが、一説には横浜の方言で英語のチャップが変化したものともいい、「肉切れ」「食事」という俗語だそうです。明治時代、横浜には、チャブ屋という簡易洋食屋があり、ここで座敷用に脚の短いテーブルが使われました。それをチャブ台と呼んだそうです。東京などでも牛肉屋などで使われるようになり、卓袱台の言葉も一般化していったようです。ただ、明治時代家庭で使用するのは、東京・大阪などの都市部に限られ、全国的に普及したのは、大正中頃から昭和初期になってからです。

【今後の展示予定】

企画展「夏休み作品展」

8月15日(火)～9月10日(日)

*夏休み体験学習講座で製作した作品を展示します。

企画展「渋谷駅とその周辺写真展①」

9月15日(金)～10月9日(祝・月)

*昔の渋谷地域を撮影した写真を展示します。

特別展「生誕120年記念 折口信夫の世界」

10月17日(火)～12月17日(日)

*渋谷にも住んだ折口信夫博士の生涯をたどります。

白根記念

渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆ AM9:00～PM5時(入館はPM4:30まで)

休館日 ◆ 月曜日(休日の場合はその直後の平日)・年末年始

入館料 ◆ 一般:100円(80円) 小中学生:50円(40円)

※1団体は10名以上の団体料全

※60歳以上の方 障害のある方と付き添いの方は無料

お問い合わせ ◆ 東京都渋谷区東1丁目9-1 TEL:03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.2

平成18年8月1日発行